

## 長期宿泊体験活動検討委員会 第5回 議事要旨

- 日 時：令和2年10月8日（木）午後3時30分～午後5時
- 場 所：教育委員会室
- 参加者：委員長、委員13名、事務局3名 計16名

### 1 開会

- ・資料の確認

### 2 教育委員会挨拶

- ・これまでに皆さんからいただいた意見を事務局でまとめ、体系化した提案をさせていただきたい。皆さんにはもう一度今までの協議の内容を確認していただいて、次回の中間報告に向けてご意見をいただきたい。

### 3 議事

(委員長)

- ・これまでの協議を基に資料を作成した。これらが各学校で体験活動を見直す際に一つのものさしになるのではないか。これらを読んでいただいて、皆さんのご意見・感想を伺い、この会の公の報告書となる中間まとめを作成していきたい。今日はその前段階にあたる。事務局の説明後、お一人ずつご意見いただきたい。その後、各ご意見等を聞いて、さらに新たなお考えや重視したいことなどお話しいただきたい。

(事務局) 説明

(委員長)

- ・今の説明でご質問等あればお話しいただきたい。
- ・お一人ずつ3分程度でご意見やご感想をいただきたい。

(委員A)

- ・中学校セカンドスクールについては、内容については話し合ってきたが、泊数についてはあまり検討していなかったため先生方にご意見を伺いたい。
- ・「目指す資質・能力及び内容・要素」について、すごく大事なことがたくさん出てきたが、もう少しコンパクトにできればと思う。

(委員長)

- ・中学校セカンドスクールの泊数については、後ほど、各委員にお聞きしたい。
- ・目指す資質・能力については、この示し方だと多いという意見が出た。

(委員B)

- ・私も気になったのは泊数について。中学校セカンドスクールの今の4泊5日というのは、妥当だと思う。それぞれの学校で行先が違うが、現地までの移動は往復で1日くらい取られることを考えると4泊5日は必要。
- ・小学4年生はあまり遠くまで行かないし、初めての宿泊に慣れるということが大事なので、今までの2泊3日が丁度よいと思う。
- ・小学5年生は、セカンドスクール以外ではあまり長い間親と離れる経験がないので、先生たちのことや生活指導員の確保が調整できれば、今まで通りでよいのではないかと。
- ・資料の育成を目指す資質・能力について、セカンドスクールに関する要素がたくさん詰まりすぎている。一つの大きな目標に対しての細かい課題というのであれば分かるが、多く詰め込みすぎているので、子どもたちにゆとりのある形で考えていきたい。

(委員C)

- ・体験の内容を教科に当てはめるとするのはすごくよいと思う。一方で、中学校は教科担任制をとっていて、小学校も教科担任制をとるような話がある。そうすると、スケジュールを作るのがすごく大変なのではないか。引率する先生に応じてやるのが限定されてしまう懸念がある。そこで、仏壇産業で第一次産業・第二次産業・第三次産業を学ぶといったような、もう少し具体的な事例があると体験と教科を結び付けることを考えやすくなるのではないかと。

(委員D)

- ・小学校と中学校で同じことをやっているところがある。小学5年生で星空観察をしている学校があるが、中学1年生でも星空観察をやっていたりする。
- ・第五中学校だと現地の中学生と交流をしているが、他の学校でもしようとする、それに関わる事前事後の学習に充てられる時間が用意できるのか、そのために何を削るのかという課題が出てくる。
- ・小学校の段階で集団生活でのきまりや基礎を身に付けるが、中学1年生には中学1年生なりの集団生活で身に付ける力があると思う。

(委員長)

- ・方向性の示し方についても考えていかないといけないと思う。

(委員E)

- ・表に書いてあると実施しないといけないと思ってしまうが、基本的に例示なのですべて行うわけではない。
- ・これまでの皆さんのご意見をまとめてみると、自然体験と、総合的な学習の時間の学びではなく特別活動としてのよりよい人間関係の構築という点を柱に据えた。
- ・もう一つの柱として学年ごとの特色があるので、つながりというよりも一つ一つ単体として考えた。プレセカンドスクールは、初めての宿泊体験活動という点。小学5年生のセカンドスクールは、分宿であることと長期の宿泊という点。中学校セカンドスクールは、中学2年生で職場体験があるので、その前段階としてのキャリア教育をそれぞれ特色として捉えた。
- ・今までは自然、長期宿泊、協働・交流という3つの柱があった。自然体験は、それぞれの学年の教科の学習に基づいて位置付けている。
- ・目指す資質・能力については、最初は全部学年ごとに振り分けていた。しかし、一つの見出す資質・能力が学年をまたがっていたりしたので、一つにまとめてしまったが、そこから整理しないといけないと感じている。

(委員F)

- ・本校の教員に話を聞くと、小学5年生で6泊7日行けるのは、プレセカンドスクールとして4年生で2泊3日行っているからに他ならないとのことである。4年生のプレセカンドスクールで初めて、宿泊学習について指導するので2泊3日は必要だと思う。また、4年生で宿泊学習の指導をしっかりと行っていないと5年生のセカンドスクールの際に保護者から様々な声が挙がってくるだろうとも、その教員と話していた。4年生の時に宿泊についての学校や市の方針をしっかりと伝えているので、5年生のときは保護者の方もある程度大きく構えて送り出してくれる。そういった意味でも4年生でのこの泊数は大切だと思う。
- ・5年生については、似た内容を2回やっていることもあるので、それをまとめて1回にするのは問題ないと思う。
- ・体験活動を教科に振り分けていた時期が一時期あり、また総合的な学習の時間でとる形に戻った。その教科に振り分けていた時期に丁度セカンドスクールに行っていたが、教科に振り分けるのは、なかなか難しいと感じた。もし各教科に振り分けるのであれば、新しくなった学習指導要領をしっかりと分析して、本当にその教科でいいのか検討する必要がある。

(委員G)

- ・「よりよい人間関係の構築」については、要綱にねらいとして掲げられているので大事

だと思うが、児童生徒相互の人間関係以外にも人間関係はある。出すのであれば、様々な人間関係を取り上げた方がよい。

- ・「授業時間の確保」については、この会以前に2年位前から指導課の方で既に指導されていると思う。この会の中で、こうあるべきというのをそこまで議論したかという自分には疑問が残る。「教師の働きかけ」についても、この場でそこまで議論したものかなと思う。手引きの作成についても、この会議で提案していないのではないか。
- ・セカンドスクールの5泊6日がよいとはなかなか言えないと思う。これまで6泊7日で行って来て、5泊6日にする理由に、授業時数の確保が挙げられている。武蔵野はセカンドスクールを掲げて来て、授業の時間として行っているのに、泊数を減らす理由が授業時間の確保というのは違和感がある。また、教員の働き方改革も指導員の確保も全部大人の理由だと思う。それを理由とするならば、1泊減らせばこういう風に解決するというを示すべきだが、1泊減らす理由付けができていない。指導員の確保は、6泊7日だと難しいが5泊6日なら確保できるという明確な理由が必要だと思う。それができない限りは理由として示すべきではなく、日数を安易に減らす必要はないと思う。

#### (委員H)

- ・私の意見としては、5泊6日にしてもあまり変化はないかなと思う。
- ・教員の働き方改革とか生活指導員の確保というのは、完全に学校側の都合だが、それが極めて深刻な状況になっているというのを理解していただきたい。校長会から依頼して指導課から大学に声をかけてもらっているが、難しい。副校長はずっと電話をして生活指導員の確保をしている。着任してから毎年生活指導員の確保に苦戦しているが、着任1年目より3年目の方が、確実に確保が難しくなっている。本当に持続可能なのかというのを考えていただきたい。生活指導員の質を問えないのが現状で、頭数が揃えばいいような状態。実施するのは学校なので、学校が持続可能でないと難しい。
- ・今回の検討委員会で、私自身セカンドスクールの経緯の確認や見直しができた。今後の方向性については、学年ごとに区切ったり例示を出したりすると、学校としては中学校の例示で出ていると小学5年生でやるのはだめなのかなと捉えがちになる。これは形の表現なのかもしれないが、そういったことに気を付けて書いてほしい。学校ごとにやってきた伝統があるので、それを尊重するような書き方を考えてほしい。
- ・セカンドスクールでの時数の取り方というのは、教科で取る場合には、時数の上乘せになるのは覚悟しないとイケない。総合的な学習の時間は便利な時間ではないので、そこを見直すことができたのは大きな成果だと思う。
- ・人間関係については、日誌を書くという説明があったが、これは今もしおりのものでやっている。すごくしっかり書かないとイケないような印象を受けたが、学校によって重点が違うので、市で一律の書式を作るのではなく、各学校の書式で書けばよいと思う。一生懸命悩む時間というのは子どもも苦痛じゃないかと思う。必要なことだけ書けば

よい。

- ・小学校と中学校、プレセカンドスクール、セカンドスクールで同じ活動をしているという意見が出ていたが、中学生と小学生で全然印象が違う。もちろん、小学校で何をやってきたとか、中学校で何をするとかを知って、じゃあ視点を変えてみよう、これを足そうといった研究は必要だと思うが、単純に同じ活動と捉えないでそれぞれを尊重していくことは大事だと思う。

#### (委員 I)

- ・内容については、全 18 校の内容をまとめると多くなると思うので、この柱でそれぞれの学校で発達段階に応じて内容を精査していく必要があると思う。
- ・小学 5 年生は長期の宿泊なので、「自然の有限性や自然の大切さに気付く」では目的として弱い気がする。自然そのものではなくて、自然を利用した 1 次産業について学ぶので、自然と人間の調和や関わり、食料生産について学ぶ。自然を利用してお米を作っている、主食を作っている、田んぼは自然を利用した大きな食料工場なのだというのを知ってほしい。食べることに直結していくということに気付いていくので、もう少し濃い内容だと思う。
- ・よりよい人間関係の構築については、子ども同士だけではないので、現地ならではの人間関係を作って、ファーストスクールでは体験できない関わりをしてほしい。
- ・日数については、(小学校セカンドスクールが) 5 泊になれば生活指導員の確保が楽になるかといえば、それはないと思う。この課題については、引き続き大学との連携などよい生活指導員を繋ぎとめておくような方法を検討していかないといけない。教員の働き方改革の視点で言うと、大人は基本全日程行かないで途中交代を大前提にすることも必要だと思う。5 泊 6 日ずっとは大変なので、担任も全日程行かなくてよいことの共通理解を図っていくことで、教員の負担を軽減したい。これらを踏まえて、私は 6 泊 7 日が良いと思う。本当に大変だが、1 週間行くと本当に子どもたちが変わっていく。

#### (委員 J)

- ・年間の授業時間数と泊数の問題がある。中学校の場合、1 年生は総合的な学習の時間が年間 50 時間、2・3 年生はそれぞれ年間 70 時間ある。総合的な学習の時間は、セカンドスクール本番だけではなく、事前事後の学習も含めていて、さらにキャリア教育もやってかないといけない。そうすると総合的な学習の時間の扱いをどうするかという問題がある。教科でセカンドスクールの時数を取るという話があったが、それもなかなか難しいので、そうすると 4 泊 5 日という泊数と総合的な学習の時間の扱いについては、もう少し考えないといけないと思う。中学校のセカンドスクールは、1 日目の午前中で行って、最終日の午後に帰ってくるので、実質活動できるのは 4 日間である。そうすると、様々な体験ができるという意味では、4 泊 5 日がよいと思うが、総合的な学習の時

間の扱いを考えていかないと難しいところもある。

- ・小学校と中学校の農作業の重なりというのが話題になっていたが、中学校は、第二中学校以外はすべて秋に行っている。秋に行く理由というのが、春に行く3年生の修学旅行にある。管理職が2人同時に学校を離れることはできない。春に修学旅行に行くと、どうしてもセカンドスクールは秋に行かざるを得ない。そうすると小学校のセカンドスクールを秋に行っていた場合には、小学校・中学校で稲刈りをする事となり、農作業体験に重なりが生じてしまう。もし小学校のセカンドスクールは、春という風に重なりを無くしていただければ、小学校で田植えをして中学校で稲刈りをする事ができると思う。
- ・各学校で民宿泊か農家泊か、など宿泊形態が違う。民宿に泊まると民宿で様々な体験ができるが、完全な農家だとそういったことができないので、学校によって事情が違うなと感じた。
- ・各学校にこれまでの現地とのつながりがあるので、そういったことも大事にしていかないといけない。泊数について、現地の受け入れる側がどう考えているのかということも聞いてみる必要もあるのではないか。

(副委員長)

- ・小学5年生については、自然体験とともに仲間との関わりが柱としてあるが、それには一定の時間が必要。そういった意味では、ここで提案のあった5泊よりも6泊の方がいいのかなと思った。だが、5泊でも一定のご意見をいただいたと思う。
- ・中学校は挑戦というキーワードができたが、内容についてはその学校、生徒の事情に合わせて考えていただきたい。
- ・目指す資質・能力及び内容・要素として事務局の説明でキャリア教育が挙げられた。先生にご意見をいただきたいが、現地でやるキャリア教育というものがセカンドスクールの中でどのくらい必要なのか。学校で行うキャリア教育は当然あると思うが、セカンドスクールの中で日にちを取ってまでやる、キャリア教育を踏まえた職業観の育成というのがどの程度必要なのかご意見いただきたい。

(委員J)

- ・キャリア教育に直接関わるか分からないが、武蔵野市以外の地域で、修学旅行で岩手県の方で農家1泊、ホテルに1泊泊まったことがある。農家に泊まったことによって、ある女の子がそこで自分の行く道を探して、実際に農家に嫁いだことがあった。

(副委員長)

- ・もちろん結果として、そういったこともあると思う。セカンドスクールの大きな柱として、キャリア教育を大々的に掲げる必要はある、ということでしょうか。

(委員 I)

- ・私は東京で生まれて東京で暮らしてきたので、セカンドスクールに行って初めて、農業ってこういうものなんだということを知った。畑や田んぼの存在がこんなに大きなものなんだということを知ったのは、自分の中で大きかった。子どもたちにも近いものを感じていて、武蔵野では見ることができない大切な職業の話を聞ける一つの大きな機会だと思う。Society5.0 で大きく変わるかもしれない農業なので、これから面白いだろうなという気もしている。

(委員 H)

- ・キャリア教育を記すことについて、私は違和感がある。なぜかと言うと、当該学年にふさわしい特色ある活動を小学4年生から順に見ていった時に、急に中学1年生でキャリア教育が出てくる。セカンドスクールは子どもたちにとって強烈な体験なので、農家になろうと思う子もいるだろうと改めて思ったが、他の強烈な体験もあるわけで、この中でわざわざ取り上げるものだろうか。キャリア教育を見出しとして付けることによって学校の活動が方向付けされてしまう。先ほどの農家に嫁いだ子の話だって、そんなのは意図していないこと。意図していないけれどもそういった感動があるというのが大事なことだと思う。ここまでキャリア教育を踏まえた職業観の育成まで書いてあるので、これを書いた意図があると思うが、表現として検討が必要だと思う。

(副委員長)

- ・もちろん現地で稲刈りをして、実際に体験すること自体は意味があると思うが、セカンドスクールに行ってキャリア教育を踏まえた職業観の育成をするとまで、大々的に打ち出す必要があるのか、疑問に思った。

(委員 B)

- ・職業観の育成とまで言ってしまうかというとは分からないが、セカンドスクールというのは強烈な体験だと思う。長女は、中学3年生の進路選択で、北海道に行って高校で農業を学びたいと道立の高校を受験した。3回のセカンドスクールを体験してきて、本人はずっと心の中に秘めていたらしい。現在高校3年生になって公務員試験を受けているが、公務員試験が受からなかったら、やっぱり農業をやりたいと言って、今度はJA とかを考えている。子どものときに受けた強烈な体験というのは、キャリア教育という言葉は違うかもしれないが、職業観につながるものとして残るものがあるのではないかと。セカンドスクールが子どもたちに与える影響というのはすごく大きいと思うので、大事にしてほしいというのが保護者としての思いである。

(委員 E)

- ・「キャリア教育を踏まえた職業観の育成」という表現については検討の余地があると思う。ただ、小学校以上に中学校では進路を選択するということが大事になってくる。小学4年生・5年生の特色ある活動とは質的にも段違いなものとして設定した。中学1年生で急に違うというのは意図的な部分もあるが、全体で掲げていくものなので、そこはもう少し精査しないといけないと思った。

(委員長)

- ・社会との接触というのが、だんだん学年が上がるにつれて深まっていくので、中学生という段階での職場体験というのは非常に大切になってくる。表現として、「職業観の育成」という言葉は少し考えていきたい。泊数について、先生方に伺いたいというお話が最初あった。いくつか出てきたが、これに対して何かさらにご意見があれば伺いたい。

(委員H)

- ・中学校の難しさは、教科担任制という点。この時間抜けるとかが不可能に近いくらい難しいというのは分かる。ただそこから導きだせる結論というのは私には分からないが、小学校とはちょっと事情が違うだろうと思う。

(副委員長)

- ・そこから導かれる日数と、これは必須という目的を達成するには何日必要なのか。

(委員J)

- ・私は中学校セカンドスクールで行われる体験などを考えると4泊必要だと思う。ただ五中や六中は市内でいうと小さい学校なので、1年生がセカンドスクールに行ってしまうと、英語と数学は少人数指導でやっているが、少人数指導もできない。体育も2人のうちどちらかの教員が引率した場合授業ができない。残った教員でどうにかやっている。土日でセカンドスクールに行っても、振替で休まないといけない。ただ、内容的なところでいうと4泊ないと難しいのかなと思う。

(副委員長)

- ・今やっている内容というのは、時間があるからやっているのではなくて、全て必要なのか検討すべきだと思う。

(委員I)

- ・今やっていることをやるには4泊必要だと思う。ただ、セカンドスクールの目的を達成するために4泊必要かという、それはまた別の話になる。



(委員J)

- ・では3泊4日でやるとなったときには、各学校でどの体験を削るのか、という話になる。以前いた一中のプログラムで仮に3泊4日になったときにどれを削るか考えたら、どの活動も得るものがある。また、五中だと、現地の中学校と交流もしている。どこを削ったらいいのか迷う部分がある。

(委員長)

- ・泊数についての皆さんの意見を伺った。他にもう一度話題にしたいことがあれば、ぜひ伺いたい。

(委員H)

- ・生活指導員については、本当に課題。これについては、学校でも努力するが、任されても厳しい。学校だと初任者はよくジャンボリーに行くが、それと同じような形で、市の職員の方にもご協力いただけたらと思う。学校としては、そういった形で、武蔵野市にも具体的に生活指導員を確保する方法について検討いただきたい。

(副委員長)

- ・ジャンボリーは、主管課以外の職員も現地に赴き支援しているので、ありえない話ではないし、行きたい職員はたくさんいる。ただ、職場が行かせられるかというのが問題。もう一つの方法として、民間で社会教育活動の一つでキャンプ活動をしている団体がそれなりにあるし、その中には学生リーダーをある程度抱えている団体もある。ある程度そういった団体にまとめて依頼することも検討しないといけない。できるだけ副校長の負担を軽減するような形を考えたい。

(委員I)

- ・ティーチングアシスタントやサポートスタッフのように、ある程度、市でまとめて採用するようなシステムがあるとよいと思う。生活指導員の確保が楽になることはないと思うので、市職員が参加するのは大歓迎。

(委員長)

- ・大学生は、年々5泊とか従事できない状況になっているので、なかなか先が見えてこなかったが、今の一連の話を聞いて少し先が見えてきた。

(副委員長)

- ・前半の話はあまり期待できないが、後半の社会教育団体に依頼するというのは方法の一つだと思う。

(委員長)

- ・実際できるかは別として、市の職員としてセカンドスクールを実際に体験できるのは意味があるかもしれない。
- ・生活指導員の確保というのは、元々この検討委員会の検討課題の一つの柱としてあったので、何らかの方向性は掲げたいと思っていた。一つの案が出たというのは有難い。

(事務局)

- ・次に評価の話を委員長からお話いただきたい。

(委員長) 評価についての説明

- ・区切りのよい時に市としてアンケートを実施してきた。学校としては、参加した子どもの感想や子ども変容等を感じた保護者の声などからも一つの評価ができるが、やはり数量的に評価できるようなものがあったとしてもいいのではないか。大がかりなものだと学校も大変だが、ある程度公の機関が作成しているもので、入力さえすればグラフが出て変化を確認できるものがあった。各学校で年度ごとにそれに打ち込んで、セカンドスクールの前後でどこが伸びたとかを確認する必要があるのではないか。定性的な、感想とか意見とともに、数量的に全体の評価を続けていく必要があるのではないかということが示されている。
- ・アンケートを、行く前、行った後、2か月後とかでやると、伸びた項目、継続的に成果のある項目、行って伸びたがすぐ戻ってしまう項目等も分かる。

(事務局)

- ・先ほどご質問があった、「よりよい人間関係の構築」についての、振り返り日誌の詳しいお話と、「教師の働きかけ」についての手引きの作成について、委員長よりお話いただきたい。

(委員長)

- ・手引きというのは書きすぎかもしれないが、学校側で何かこんなところを見てもらいたい、声かけしてもらいたいということが分かるものがあって方がいいのかと思った。子どもたちの変容というのは、1日目と4日目では挨拶が違っていたりするが、周りもしているので自分では気付かなかつたりする。それを生活指導員や教員がすぐその場で声かけをして褒めていくことで自信につながる。今までもやってきているが、生活指導員や教員が子どもたちの変化に声かけしていくと一人一人の動きがよい方向に変容する。自信につながったりするという提案。
- ・日誌については、各学校でしおりを作って日誌を書いていると思うが、今日やったことだけではなくて、今日がんばったことやできなかったこと等を付け加えたような日誌

にするのもいいのではないかと思った。

(委員E)

- ・書き方のことでいうと、新学習指導要領の中で、振りかえって次に向けて考えるということは言われているので、普段の授業の中でも意識していると思う。セカンドスクールにおいても、子どもたちが自分を見つめる時間というのが大切。改めて新学習指導要領を確認した上で、セカンドスクールのねらいの中に、そういった振り返りについても含めていきたい。

(委員I)

- ・統一した何かを作るという訳ではない、ということでしょうか。

(委員E)

- ・中身として、ということ。

(委員H)

- ・何を大切に、どう育てていきたいかというのは、初めて生活指導員に伝わることになると思う。

(委員長)

- ・生活指導員は安全面とか安心に関して、子どもたちへの接し方で理解が十分とは言えない面もあると思う。接し方について文書を作っている学校もあると思うので、そういったものを整理していけたらいいと思う。
- ・今日お話しした方向性の話というのは、やらないといけないというよりもこういったことをしたらいいのではないかという提案になる。学校の一つの指標になるようなものを作っていきたい。

(事務局)

- ・日程の確認
- ・次回について